アルゼンチンワインの飲み頃をめぐり専門家の見解が大きく分かれる、研究で判明

5カ国の専門家は35年熟成のワインでも見解が分かれ、単一の飲み頃期間では購入者に誤解を与える可能性が示された

2026年11月21日（土）



11月20日（金）に学術誌npj Science of Foodに掲載された研究によると、5カ国のワイン専門家は、ワインがあとどれほど熟成できるか、いつ飲むべきかを評価するよう求められた際、しばしば大きく意見が分かれた。

研究には、ボルドー、ロンドン、サンパウロ、成都、カリフォルニア州デービスのワイン専門家140人が参加した。ブラインドテイスティングでは、単一の生産者によるアルゼンチンワイン13種を評価。内訳は赤9種、白4種で、ヴィンテージの経過年数は3年から35年にわたった。参加者はそれぞれ、ワインの好みの度合いを評価し、熟成可能な期間を推定するとともに、感覚的な特徴を記述した。

著者らによると、研究が扱ったのはワイン界の基本的な問いだ。異なる市場の専門家が同じワインを同じように捉えるのか、また、ワインの熟成ポテンシャルに対する評価は、好みの度合いと密接に結びついているのかという問いである。答えは一様ではなかった。各パネルのワインの描写には共通点が見られた一方、用語の使い方や、飲み頃と今後の熟成に関する判断には無視できない違いがあった。

赤ワインについて、研究者らは共通する描写の核を見いだした。研究で用いられた83の記述語のうち、54語はすべての調査地で使われていた。それでも、用語の使い方には地域ごとに十分な違いがあり、各パネルの判断は、偶然に予想される以上に一致度が低かった。論文によると、この違いは特にボルドーで明確で、テイスターは構造や熟成の進行を示す兆候をより重視していた。

また、少なくとも赤ワインでは、ボトルの熟成年数が増すほど、今後の熟成可能期間の推定は概して短くなることも分かった。著者らは、熟成年数が10.9年増えるごとにオッズ比が0.30となったと報告しており、熟成の進んだボトルほど、残された飲み頃期間が短いカテゴリーに分類されやすいことを示している。しかし、こうした大まかな傾向が意見の一致につながったわけではない。どの熟成年数でも、専門家の判断はいくつものカテゴリーに分かれていた。

テイスティングで最も熟成の進んだワインにも、こうしたばらつきが見られた。35年熟成のボトルについて、パネリストの3分の1以上は、明らかにピークを過ぎた段階ではなく、最適期、あるいはそれを過ぎた段階にあると判断した。著者らは、このような意見の不一致から、単一の熟成評価では専門家の見解に大きなばらつきがあることが見えにくくなると指摘した。

好みと、今後の熟成ポテンシャルの予測には関連があったものの、その度合いは限定的だった。研究で報告された正の相関は弱く、rho値は0.37だった。実際には、より長く熟成できると判断されたワインほど好まれる傾向はやや強かったが、両者を同じ指標とみなせるほど強い結びつきではなかった。

著者らは、専門家の判断に大きなばらつきがあったことから、単一のカテゴリーをワインに付与するより、意見の分布を示すほうが有用な場合があると論じた。この指摘は、学術的なテイスティングパネルにとどまらない意味を持つ可能性がある。ワイナリー、輸入業者、小売業者、コレクターにとって、単一の専門家による飲み頃期間では、異なる市場でワインがどのように受け止められるかを単純化しすぎる恐れがあることを、今回の結果は示唆している。また、各国で判断が用いられる場合には特に、販売資料や業界内の議論、評論家による評価で熟成の推奨時期をどう伝えるか、幅広く見直すきっかけにもなり得る。

この研究は、幅広い地域やワイナリーのワインではなく、アルゼンチンの単一生産者のワインを対象とした。一方、熟成年数に大きな幅のあるボトルを取り上げ、欧州、北米、中南米、アジアの主要ワイン産地から専門家を集めた。論文の著者には、Catena Institute of Wine、カリフォルニア大学デービス校、ボルドーの機関に所属する研究者が名を連ねた。

学術誌に掲載された論文では、研究費の一部をCatena Institute of Wineが負担したことが開示された。同研究所は、研究で使われたワインを生産した商業ワイナリー、Bodega Catena Zapataと関係がある。著者らによると、研究所に所属する著者として明記された者の貢献を除き、資金提供者はデータ分析、結果の解釈、論文投稿の決定には関与していない。さらに、共著者の1人がSeguin Moreau Cooperageの科学ディレクターであることも開示された。著者らによると、同社は研究費を

拠出せず、研究過程にも関与していない。